

低密度植栽試験地調査（成長量・生存率）5年目秋調査結果

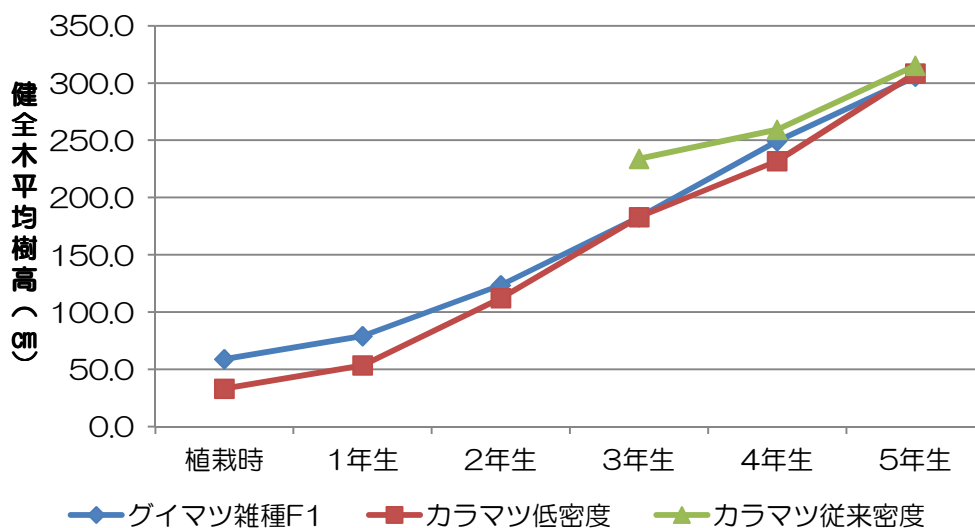
1 成長量について

2019年11月に実施した調査において、低密度植栽試験地及び対照地における平均樹高（健全木：食害等を受けていない個体）は下表及び下図の通りとなった。

単位：cm

	植栽時	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生
20-39	58.8	78.9	123.3	182.8	249.2	305.6
20-42	33.0	53.3	112.1	183.0	231.9	308.4
対照地				234	254	314

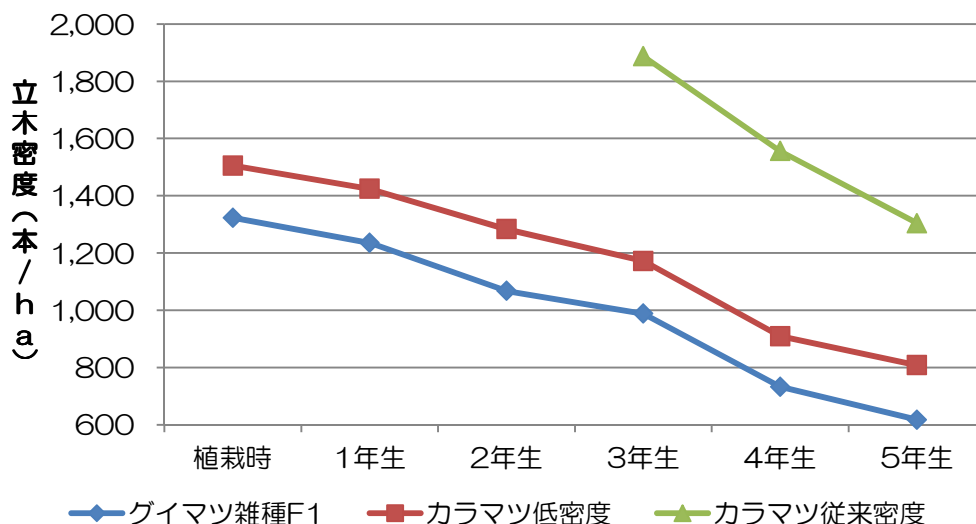
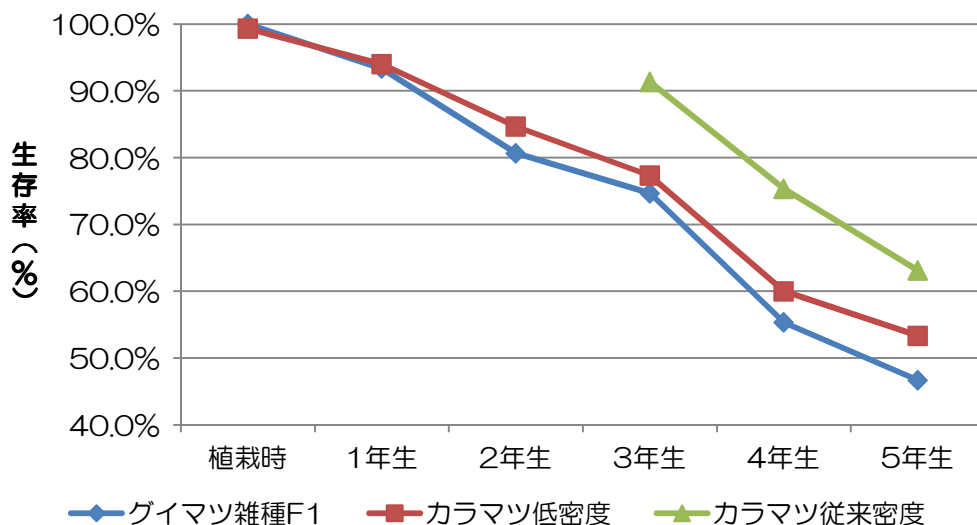
注) 対照地のうち4年生は2つ、5年生は3つの小班の平均値



健全木の平均樹高成長量はグイマツ雑種F1（以下、F1）が本年春と比較して56.3cm、カラマツ低密度植栽地は本年春と比較して76.5cmとなった。また、健全木の比率はF1が36.0%、カラマツが16.3%となり、春調査（F1：42.7%、カラマツ21.3%）と比較して大きく減少した。この1年間でF1については枯死木が比較的多く発生した。

2 生存率について

低密度植栽試験地及び対照地における生存率及び立木密度(本/ha)は下図の通りとなった。試験地における生存率はF1が46.7%、カラマツが53.3%となっており、従来密度(2,066本/ha)で植栽したカラマツの5年生(63.1%)に比べて低くなっている。F1においては、萌芽更新した広葉樹との競争の結果、生存率が低下したと考えられる。立木密度換算値ではともにも1,000本/haを下回る結果となり、不成績造林地化する事が懸念される。



3 5年目秋調査終了時点のまとめ

低密度植栽試験地において、生存率および健全木割合は対照地と比較して著しく低く、不成績造林地化が懸念された。植栽木の立木密度よりF1は2回目間伐完了時、カラマツは初回間伐完了時程度の立木密度となっており、除伐等を省略できる可能性が示された。今後は通常の施業を必要とする時期に成林状況を確認し、適切な時期に施業を実施する予定である。